

保 育

子どもの感じ、考え、試す意欲を育む環境とは

— 3歳児の実践を通して —

吉 原 智 恵 美

1. はじめに

近年、子どもを取り巻く社会環境では家庭や地域における人間関係の希薄化、都市化、情報化といった変化に伴い、子どもの人とかかわる力や学びへの意欲や関心の低下、直接体験の減少などが問題だと言われている¹⁾。そういった社会状況をふまえ、平成20年度の幼稚園教育要領の改訂では、多様な体験や言葉の重視、思考力の芽生えなどが目標としてあげられている。「体験」という言葉が一つのキーワードとなっているが、柴崎(2008)は「体験の豊かさ」について「幅の広さよりも、一つの体験にじっくり取り組めることが大事である」²⁾と述べている。何をしたかでなく、どう深くかかわったかが、子どもの内面の育ちに意義があるということだろう。そして、じっくり取り組むということは、子どもが周りの様々なものや出来事とかかわりながら感じ、考え、試す、ということを繰り返していることだと考える。その繰り返しの中で子どもの心情や思考は深まっていくものと考えられる。しかし、じっくり取り組めるためには対象への興味、疑問や好奇心、やってみたいという意欲が必要である。3歳児の6月の梅雨の時期のことである。飼育ケースの中のカタツムリをじっと見つめ、「お父さんになった(大きくなった)。見て!お父さんになった。お口が見えた。ぺちゃんこのお口をしてる。おかしい。カタツムリっておかしい。」とつぶやいている姿が見られた。飼育ケースにはりつき、殻から大きく体を出して伸び縮みしながら動いているカタツムリを見た驚きや感動、不思議に感じた事をそのままに表現している。子どもたちは日々の何気ない場面で多くの

ものと出会い、心を揺り動かしていることがわかる。3歳児にとって、周りにある初めての環境、人、ものとの出会いは様々な感情や思いを生じさせる。それは、未知のものへの不安であったり、新しく出会うものや出来事への新鮮な驚きであったり、興味だったりする。「3歳児は“探索時代”といわれるほど、自分の周りに目を向ける時期であり、今までに経験してきた世界が狭く、既知の知識や手段の持ち合わせが少ないので好奇心がいっぱいで、知りたがり、試したがりやである」³⁾と森上(1986)は述べている。自分の周りの環境との出会いが、好奇心を刺激し、様々なことを感じたり、考えたりしながら疑問や発見をし、探求が思考を深め、やってみようとする意欲が生まれてくると考える。幼児期は環境を通して行なう教育が基本であり、特に3歳児は人的環境や空間的環境からの影響を大きく受ける。そこで、子どもにとって魅力的で心動かされる環境、つまり、「感じ、考え、試す」ことにどっぷりとつかることができる環境や幼児の能動的な行動を促す力となる信頼できる教師の存在が大きな役割をもっていると考えられる。

以上のことをふまえながら、本研究ではテーマを設定し、実践を通して幼児理解を深め、環境や教師のかかわりについて考察する。

2. 研究の構想

(1) めざす子どもの姿

3歳児は自己主張が強くなり、自我の芽生えとともに自信や自尊心を培い、意欲を高めていく時期である。なんでも自分でやりたがる自立心が向

上する一方で、大人への依存心ももっている。教師の存在を通して周りのものや友だちとの関係を広げていくのである。遊びの中でも、必ずしも明確な意図やイメージをもっているのではなく、教師や周りの真似をしたり、「～しながら考える」「～しながら感じる」というように、感じたことや思いを無意識に行動としてあらわしている。その何気ない言葉や思いを教師が支え、意味づけることや体験としてためこむことが、自分なりに考える喜びややってみようとする意欲につながるのではないかと考える。そこで、本研究においてめざす子どもの姿を次のように設定した。

様々な人やものとかかわり、自分なりに感じたり、考えたりしたことを、楽しんで表したり喜んでやってみようとする子ども

(2) 具体的な方策

めざす子どもの姿に向けて、具体的な方策として次のように考える。

- ・子どもの好奇心を刺激し、心を動かされる環境や教師のかかわり
- ・興味や関心をもったことに落ち着いてじっくり取り組める環境や教師のかかわり
- ・子どもの思いや考えを広げる環境や教師のかかわり
- ・子どもの思いを受けとめ共感し、意味づける教師のかかわり

3. 実践事例

実践例1「色水・石けん遊び」9月～10月

〈エピソード①〉

「泡がいっぱいになった！」9月28日

毎日常色チリ紙やヨウシュヤマゴボウを使って色水を作っているA女。作った色水に石けんを入れて泡立て器で泡を作ると、「見て！」と教師に見せて喜んでいる。その後、作った泡入りの色水をビニール袋に入れると、自分で輪ゴムを巻きつけて袋の口を閉じる。そして、教師のところへやってくると、教師をニコニコしてじっと見ながら、色水の入ったビニール袋を両手に持って上下に

振って見せる。教師が「どうしたの？」と聞くと、何度も同じようにやって見せ、少ししかなかった泡がたくさんに増えた。（ビニール袋を手で挟むようにして力を入れ、ビニール袋を少し膨らませるように持っている）そこで、A女が伝えたかったことに教師は気づき、「あっ！泡がいっぱいになったね！」とA女に言葉をかけると、また、ビニール袋を振って見せる。教師が「振ったら泡ができるんだね」と言うと、「そう！」と言って力強くうなずくと、その後も何度も繰り返して振ってみせる。その様子を、教師の側でじっと見ていたB女がいる。教師が、A女に「先生にもやらせて」と言うと、「いいよ」と貸してくれたのでA女と同じように振って見せ、「泡がいっぱいになったね。おもしろいねー」とB女に言葉をかけた。すると、B女は、「わたしにもやらせて！」とA女に声をかけ、同じようにビニール袋を振って泡が出ると、「うわー！泡がいっぱいになった！」と歓声をあげ、A女と顔を見合わせ喜んでいる。



図1 泡がいっぱい

〈エピソード②「持ってみ！」9月28日〉

自分が作った石けん入りの色水をビニール袋に入れたC女、そのまま手洗い場にもっていき、その中に水を注ぎ始める。そうして袋いっぱいになった色水を持って教師のところへやってくると「見て！」とばかりに教師の前に差し出す。教師が「色水がたくさんになったね。」と言葉をかけると、「水を入れたんよ」「水を入れたら（色が）薄くなった」と答え、「持ってみ！」と教師に渡して教師をじっと見ている。教師が色水の袋をもって「重たいねー」とC女に言うと、「うん！重いんよ」とうれしそうに笑い、隣にいたD男に「Dくん 持ってみ！」と渡すとDくんは「おもーい！」

と答えた。「Aちゃん 持ってみ!」「Eくん 持ってみ!」「Fくん 持ってみ!」と次々に近くで見ていた友だちに声をかけ、色水の袋を持たせていく。少し離れた机で色水を作っていたG女にも、肩をトントンとたたき、「持ってみ!」とわざわざ声をかける。近くにいた友だち全員がすむと、辺りを見回して探し、少し離れている砂場にいた別の教師を見つけると走って伝えに行く。

〈エピソード③「泡がちがうよ」10月4日〉

F男とH男は仲良しでいつも一緒に遊んでいる。ヨウシュヤマゴボウで色水を一緒に作っていたとき、隣でD男が泡立て器を使って泡を作っているのを見て、F男が「泡を作りたい」と教師に言う。教師が「ここに石けんがあるよ」と石けんを色水に入れると、F男とH男はヨウシュヤマゴボウの実をすりつぶすのと同じように、すりこぎを使って石けんをつぶしてみるが泡は出てこない。そこで、F男はD男の方をまた見ている。おろし金を使って石けんをすりおろしていることに気付いたが、みんなが使っている。教師が「どうしようか?」と言葉をかけるが困ったようにしている。すると、H男が「これ 入れて!」と大きな石けんをもってくる。F男は「えー?!」と困ったような声をあげた。教師が「どうなるか やってごらんよ」と言うと、H男も「どうなるか やってみよ!」と言ったので、F男は石けんを色水に入れて泡立て器を左右に動かして石けんをまぜる。少しずつ泡が出てきたので喜んで繰り返している。それをじっと見ていたH男は、隣のD男が作っている細かな白い泡を見て、「泡がちがうよ」と自分たちのものと見比べて言った。教師が「どうちがうの?」と聞くと「ムニユムニユ(D男)とあかあかー(色水の色)」と言い「もっと あわあわやって!」とF男に声をかける。F男は泡立て器をゆっくり動かしているの、泡ができてはすぐに消えている。それに気付いたH男は「消えていくよ?! あわあわが」と教師に伝え、教師が「泡が消えていくの?」と聞き返すと、「うん。でもシャボン玉が出てくる」(大きな泡になる)「あわあわがポコポコになった」「ポコポコー?!」「うん、もっ

とまぜて!」「あつ、まぜたらこぼれちゃう」とF男や教師に自分が感じたことや思ったことを次々に話す。

〈エピソード④「濃いねー」10月5日〉

ヨウシュヤマゴボウの実を使って色水遊びをしていたI女。色水ができると、ビニール袋に入れて、また作る、ということを繰り返している。そして、ヨウシュヤマゴボウの実をたくさんすり鉢に入れると、すりこぎですりつぶしてとても濃い色の色水を作りペットボトルに入れている。教師が、「うわー!濃い色だねー」と言葉をかけると、「濃いー?!」と聞き返す。「うん、濃いよ。ほら、のぞいてごらんよ」と言うと、色水の入ったペットボトルを目にあてて、「あつ!見えない!」と驚いたように言う。「色が濃いから見えないねー」と言葉をかけると、何度もペットボトルをのぞいてみている。そして、「Jちゃん、見て!濃いんよー!」「濃いかつたらね、見えんのよ」と色水を見せて言うと、J女もペットボトルをのぞいて「うわー!濃いー!」と歓声を上げ、「先生、濃いー!」と教師を振り返って大声で言う。



図2 見えないよー

【考察】

エピソード①では自分の興味のある遊びを繰り返すことで、体験の中で自ら「振ったら泡が出る」という仕組みに気づいた。その面白さを喜んで教師に伝えていることから、子どもは自分の驚きや発見を最も身近な教師と共有したい思いをもち伝えようとするのがわかる。また、①～③の事例では、周りの子どもも身近な教師を通して友だちのしていることに興味をもち、やってみようとする気もちが生じているのがわかる。3歳児のこ

の時期は、教師が媒介となって様々なものや人とかかわる頃である。教師が子どもの思いや感動を受けとめ、言葉にして表したり周りにいる友だちの考えにふれる機会を作ったりすることが、いろいろな事象への興味や関心を高め、意欲をうながすきっかけをつくるために大切であると考えている。

エピソード②や④のように、色水作りの中で子どもが感じたことを教師が共感し、「重いね」「濃いね」と言葉で返していったことで子どもたちがそのことを繰り返し言動で表したことから、新たに「重さ」「濃さ」を実感した喜びを感じたことがわかる。子どもたちは様々なものとかかわりながら、たくさんの思いや感じたこと、考えたことをため込んでいる。体験の中で得た実感を教師が意識して言葉や行動と結び付けることは、自分なりにわかる面白さや物事への興味や関心を生じさせ、様々なものや人とかかわりを深め、意欲を高めると考える。

エピソード③では、泡作りの中で自分なりに感じたことや考えたことをそのまま言葉に出していた。教師が子どもの感じたイメージを大切に受け止めながら、思いや考えを尋ね返すことで新たな発見や考えを引き出すことがわかった。教師が子どもの思いを共感し、認めるとともに、子どもに新たな投げかけをすることが考えや遊びを深めていくと考える。

実践例2「泥団子づくり」10月

藤棚の下の日陰で、地面をスコップで掘り、その土を両手でギュッと握り、丸い形にして泥団子を作っているK女。いくつも作っては地面に並べていくがすぐに壊れてしまう。それを見てK女は「壊れる・・・」とつぶやいている。土を触ってみると、少し湿り気を帯びている。両手でギュッと力を入れると丸くなるがすぐに壊れてしまう。「どうして壊れるんだろうね」と問いかけてみるが、「わからん」と答える。

そこで、クラス全体で泥団子を作る活動を取り入れ、泥の感触や泥団子ができたという満足感を味わえる共通の体験をもてるようにした。

〈エピソード①「お顔ができたよ」10月1日〉

泥団子が必ず作れるように真土を何度もフルイにかけ余分な小石を取り除いた土を準備した。タライの中に水を混ぜて、教師は「よくこねてね」と声をかける。子どもたちは「ふわふわ」「触らせて」と言いながら両手で繰り返しこねる。J女とL男はドロドロになった土をタライの中で集め、大きな塊にしている。「Jのはねー、プニユプニユよ!」「Lのはねー、お好み(焼き)!」J女は片手でなでながら何度も表面をたたき、ペチャペチャと音がする感触を味わっている。表面が平らになってくると人差し指で穴を3個開け、「お顔ができた」と言う。L男も人差し指で穴を一行にたくさん開ける。手のひらでペチャペチャと音をたてながらたたいたりなでたりしていると穴がなくなった。教師が「あれ?穴が消えちゃったね」と言葉をかけると、その後何度も穴を開け、手でなでて穴を閉じる、ということを繰り返している。



図3 触るとプニユプニユするね

〈エピソード②「さら粉をかけたい」10月1日〉

教師がタライの土を両手で丸めて泥団子を作ってみせると、E男は泥団子をたくさん作って地面に並べる。周りにいた子どもたちも「先生、見て!きょうりゅうの卵ができた!」「Mのはサイのたまご!こっちはゾウ!」「見て!トマトみたい」「おにぎりができたよ!」と口々に言いながら丸めた泥団子を教師に見せにくる。泥団子を作ったことのあるI女が「ザルちょうだい」と教師に言ってきたので、「ここにあるよ」と用意していたザルとフルイを見せる。教師が築山の乾いた土をフルイに入れ、「さら粉をかけるよ」と泥団子にかけて見せると、N男も「これをやりたい」と言っ

てフルイをとり、自分でやってみる。I女は「さら粉、ここにあるよ」と言って築山の斜面でさら粉を泥団子にかけると、周りにいた子どもたちも、ザルやフルイを持っていき、さら粉をかけている。

〈エピソード③「どこで作る？」10月5日〉

ジョウロやスコップ、ボール、ザル、粉フルイなどの道具は子どもたちが自由に使えるように置き、自分の好きな場所を探して泥団子を作る。O男は「ここがいい！」と築山の下の地面を指差す。教師がそこにジョウロで水をかけいくと、両手で地面をこすったり、土を集めたり、両手でギュッと土を握ったりして泥の感触を味わっている。M男は「水を持ってくる！」と言ってジョウロに水を入れてもってくると、どンドン水をかけている。H男やL男もやって来てみんなで両手で地面の土を混ぜている。泥状になってくると、指の跡がつくのに気づき、何度も繰り返している。

〈エピソード④〉

「親指をそうっと動かすんよ」10月5日

築山の上部で泥団子を作っていたP男が「(以前は)できんのに、できた！」とうれしそうに泥団子を見せる。教師が「どうやったの？」と聞くと、「親指だけ、こうやって動かすんよ」と両手でそっと泥団子を持ち、両方の親指を左右に動かしながらさら粉をつけて表面をなでる。教師が「なるほどねー！親指をそうっと動かすんだね」と言うと、「うん！」と繰り返しやって見せる。

〈エピソード⑤〉

「もっと大きいのが作りたい」10月5日

K女はボールに水を入れ、フルイを持っていった築山の上で泥団子を作っている。ボールに水と土を入れて混ぜ、泥をすくって団子を作ると、フルイでさら粉をかけ、ボールの水を手で泥団子にかけると、という工程を何度も繰り返している。D男とI女は黙々と泥団子を作っている。教師が「できた？」と聞くと、「まだー！」「もっと大きいのが作りたい」と言って片付けの時間いっぱい泥団子づくりをしていた。D男は出来上がった大きくて丸い泥団子を大事そうに保育室前まで持って帰ったが、転んでしまい泥団子が壊れてしまった。

教師が「どうしたの？」と言葉をかけると、「壊れた・・・」と言ってじっと壊れた泥団子を見て立ちつくしている。教師は壊れた泥団子の土をボールの中に集めて入れると、「どうする？また作りたい？」とD男に聞いた。D男は「うん」とうなずき教師からボールを受け取った。すると、側にいたI女が「水を入れたらいいよ」と言ってD男を誘って二人で水を入れに行った。D男は土と水を混ぜ、泥をすくうとギュッと絞って泥を固め、泥団子を作り直した。

〈エピソード⑥「気持ちいいね」10月18日〉

藤棚の下で泥団子づくりをしているD男とQ女。Q女が「先生、見て！水を入れたんよ」と言って、地面に水をかけ、両手でこするように土(泥)を集めて丸める。すると、D男も同じようにしながら「先生もしよっ！気持ちいいよ」と言い、教師が触るのをじっと見ている。「本当だね。ここの土は気持ちいいね」と触ってみると、「黒のサラサラよ」と言う。Q女はいくつも泥団子を作って地面に並べ、うれしそうに教師に見せた。



図4 藤棚の下で泥団子づくり

【考察】

エピソード①～③では、泥団子づくりや土と水、泥の感触を教師と一緒に味わうことを喜ぶ姿が見られる。子どもにとって、教師は身近なモデルであり、教師がすることで自分もやってみたいという気持ちをもつことがわかる。また、初めてでも泥団子を作ることができ、満足感を味わい、次への意欲へつながった。経験の少ない3歳児には、成功体験を味わわせるための環境づくりが大切である。

エピソード④～⑥では①～③の共通の体験を土

台として自分なりにこうしたい、という思いをもちながら泥団子を作っている。子どもが意欲をもつためには、自分なりに感じたことや考えたことを試すことのできる十分な時間や場の設定と子どもの喜びや発見を認め、自信につなげる教師のかわりが必要であると考えます。

実践例3「自然物に触れたり、見立てたりして遊ぶ」10月～11月

毎朝、登園時に見つけて拾った落ち葉（1～2枚）を持ってくるO男。「先生におみやげ！」「先生にあげようと思ってもってきたんよ」と言ってイチョウの葉っぱを見せ、「チョキ！」（先が割れている）「今日はね、パー」「マイク！」といういろいろなものに見立てる。「うわー！おもしろいねー」「きれいだねー」「今日はどんな葉っぱかな？」と教師も一緒に驚いたり、喜んだりしながらO男が持ってきた落ち葉を保育室に飾る。子どもたちが登園時に持ってくる様々な木の実や落ち葉などの自然物を飾るコーナーを作り、周りの子どもが触ったり見たりできるようにする。

〈エピソード①「落ち葉のごはん」10月29日〉

2階建ての木の家の1階に松葉や落ち葉を集めて入れ、「ここはオーブンで焼くところなんよ」と言うM男とR男。「何を作っているの？」と聞くと、「スパゲッティーごはん」「生クリームをかけとるんよ」と答える。「生クリーム？」と教師が聞き返すと、R男は「そうよ、これがクリーム！」と言って松葉を見せる。M男は「これがスパイス」といって松葉や落ち葉をちぎって入れている。「お砂糖も入れなくっちゃ」と砂糖をつまんでかける。「まださわっちゃいけないよ、あったかいけー」「あったかいの？」「うん、今火がついてるから」「まだ熱い？」「まだ触ったら熱いよ」「どれくらいでできるの？」「1時間です」（M男）「10分でできる」（R男）「Mたち、コックさんなんよ！」と言って教師とやりとりを楽しむ。

〈エピソード②

「パーティーしよう！」10月29日〉

いもほりの後、芋づるで遊んでいるときのこと。S女が木の家の2階の柱に芋づるを巻きつけてい

る。「何してるの？」と聞くと、「今日はRちゃんの誕生日！これはね、飾りつけ」と答える。教師は「すてきだね！先生もやってみよう！」と言って一緒にやり始める。S女は「もっと買ってこよう！」と芋づるを取りにいく。すると、それを見てM男も「飾りつけ、買って来た」と言っ



図5 オーブンだよ

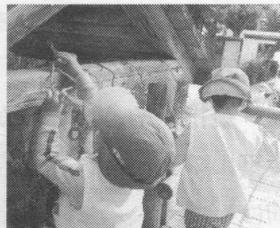


図6 いっぱい飾ろう！

〈エピソード③「先生、見て！」11月9日〉

風が強く吹き、落ち葉がたくさん園庭に落ちているので落ち葉を拾いに行こうと子どもたちに投げかけてみる。テラスには見つけた落ち葉を入れられるようにビニール袋を置く。「見て！ハートの葉っぱ！」「ぼくが見つけたんよ」とN男が教師に見つけたイチョウの葉っぱを見せる。J女は赤い桜の落ち葉を見つけ、柄の部分を持って教師に見せ、「先生、持って！先生、持ったら立つんよ！」と驚いたように言う。見ると、落ち葉がピンと立っている。「すごい！おもしろいねー」と持ってみる。「うん！」「見て！穴があいてる！」と落ち葉を見つけては教師に見せ、ビニール袋いっぱい

分の顔に横に並べてみせる。教師は「本当だ！大きいねー」「先生にも貸して」と顔の前に置いて顔を隠すと、「うわー！おばけだー！」「Iに貸して！」「おばけだぞー！」と喜ぶ。D男やL男は大きな葉っぱを見つけて両手一杯に束ねて持っている。ダンボールの箱を出すと、そこに集めた葉っぱを入れ始める。



図7 落ち葉がいっぱいあるね

【考察】

子どもたちは落ち葉の色や形から様々にイメージし、見立てながら自然物を遊びに取り入れごっこ遊びを楽しんでいる。そして驚きや感動を喜んで教師に知らせている。教師が子どもの思いに共感し、仲間に入ったり、言葉で投げかけたりやりとりをしたりすることで、子どもたちは新たな感動や発見をしていることがわかる。そのことが気づきや思いを意識することにつながり子どものやってみようとする意欲を高めると考える。

実践例4「まじよやおばけになって遊ぶ」11月 〈エピソード①「やってみよう！」11月20日〉

子どもたちは登園すると、マントや帽子、お面を身につけたりきって遊ぶ。C女は「おばけだぞー」と教師を脅かして喜んでいる。J男は木の枝に星型の紙をくっつけて魔法の杖を作ると、「お仕事に行ってくるね！」と教師に言い、森の入り口のドアから出て入る、ということを繰り返す。E男やP男はダンボールで作ったおばけの家に入って楽しんでいる。すると、子どもたちが今まで拾って集めた落ち葉がたくさん入っているダンボールの中をB女とT女が覗き込んでいる。教師が「入りたい？入ってもいいよ」と言葉をかけると、うれしそうに二人でダンボールの中に入る。それを

見てS女もやって来て「Sもやりたい！」と一緒に入る。「どんな感じ？」「お風呂みたい！」「(葉っぱの匂いをかいで) くさーい！」落ち葉は乾いてパリパリになっているので、二人が入るとパリパリに破れてしまった。服にくっついた葉っぱを見て、「うわーっ！いっぱい(葉っぱが)ついたー！」「バシャバシャって音がする」と驚いている。



図8 おばけの家に屋根をつけよう

〈エピソード②「ケーキ作りに没頭」11月20日〉

ドングリや紙粘土を使ってケーキ作りに没頭しているU女。真剣な顔でカップや紙皿などに黙々といくつも作り、片付けの時間になるまでずっと一人でケーキ作りをしていた。カップにドングリ、ビーズなどをたくさん入れて素材を全部使い切る。出来上がると作ったケーキを全部お盆に並べてのせ教師に見せに来る。「うわー！いっぱい作ったね。おいしそう！」と言うとやっとなん顔を見せた。

〈エピソード③「ぼくもやりたい！」11月20日〉

木の枝に何本もモールを重ねて巻きつけて魔法の杖を作っていたF男。教師に「先生、見て！」とうれしそうに見せにくる。「すごいね！どうやって作ったの？」と聞くと、「こっちに来て」と素材の置いてある場所まで教師を引っ張っていく。「これ！」とモールを指差す。「どうやってするの？先生にも作って」と飾りのついていない杖を渡すと、「これを、こうやるんよ」と教師に作り方をゆっくりとやってみせる。「モールを巻きつけるんだね」「うん、そう！巻きつけるんよ」と言って「はい！」と教師に渡す。そして、隣で紙粘土のケーキ作りをしているのを見ると、「Fも作りたい」と言って、今度はケーキ作りをはじめた。次の日、F男はおばけの家を見て、「お家に屋根を付けたい」「青い三角の膨らんだのよ」と

自分のイメージを伝える。カラーポリ袋の上をつまんで袋状にし、セロテープでダンボールに貼り付けていき、「屋根はできたけど、とんがってないな」と考えている。

【考察】

マントやお面などを身につけ、共通のテーマで遊ぶことのできる場を設定したことで、自分なりにいきって楽しみ、遊びのイメージが広がり夢中になって取り組めることがわかった。ごっこ遊びを通してイメージを広げることが、子どもの感じ、考え、試すことを促すと考える。

一つの空間の中にいろいろな活動ができるように環境構成したことは、友だちの思いや考えにふれやすく、自分もやってみようとする意欲につながった。また、遊びの時間を十分確保することで、興味のあることにとことん取り組むことができ、自分なりに感じたり考えたことを繰り返し試して満足感を味わったり、次への意欲を生じさせるために大切であると考ええる。

4. 実践を終えて

子どもたちは生活や遊びの中で、様々なものや出来事、人とかかわりながら、その体験の中でたくさんを感じ、あらわしている。それは時に無意識だったり、瞬間的だったりして気づかないことも多い。教師がその思いをしっかりと受け止めたり、共感したり、意味づけていくことが子どもの意欲を高めていくことがわかった。実践を通して感じ、考え、試す意欲を育むために大切だと考える環境や教師のかかわりは次の通りである。(1) 子どもの好奇心を刺激し、心を動かすためには、安心して過ごせる場や心の拠り所となる教師との信頼関係が基盤となる。子どもたちは身近な教師や友だちとの共通体験を通して対象に積極的にかかわり意欲を高めていく。また、身近な自然とかかわることは子どもたちの五感を刺激し、感動や発見、驚きや疑問を生じさせるものである。自然の変化に気づいたり、自然物を使って遊びを楽しむような環境や発見や感動をともに味わう

教師のかかわりが大切である。

(2) 興味や関心をもったことに落ち着いてじっくり取り組むためには、繰り返し遊ぶことができる場所や素材、雰囲気作りが必要である。3歳児は発達の個人差も大きく、経験も少ない。子どもが自己発揮し、それぞれのペースでやりたいことを見つけて取り組むためのゆとりある時間設定や教師の待つ姿勢、意欲を高めるための喜びや満足感を味わう成功体験が得られる環境など、一人ひとりに応じた教師のかかわりが大切である。

(3) 子どもの思いやイメージを広げ、考えを深めるためには、子ども一人ひとりのイメージを大切に受け止めながら、いろいろな友だちの考えや思いに触れることが大切である。3歳児の特徴的な遊びとしてごっこ遊びがある。いろいろなものを使ってイメージしたものになりきったり、対象を何かに見立てたり、なったつもりになってやりとりを楽しみながら、言葉やイメージを広げていくことが大切である。

(4) 子どもの思いを受けとめ共感し、意味づけることで子どもが遊びの中で何気なく無意識に感じ、考え、試していることを意識できるようにすることが大切である。教師が子どもの思いや気づきを言語化することで、子どもの思考は高まっていく。また、それらすべてが何らかの意味づけをされたり、気づきにつながらなくても、感じたり試したりすることに共感し、その体験をためこむことで次の好奇心や探究心につながると考える。

＜参考・引用文献＞

- 1) 中央教育審議会：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」、2005。
- 2) 柴崎正行：「幼稚園教育要領の基本と解説」、無藤隆・柴崎正行・秋田喜代美編、p. 27, 2008, フレーベル館。
- 3) 森上史朗：「3歳児の世界」、森上史朗編、p. 15, p. 146, 1986, 世界文化社。